英語学習者のための文を組み立てる文法試論

小　川　　明

0. 学習英文法を眺めて気付くことは、文をどのように形成していくのかという部分がまとまっていないことである。つまり文の組み立て方が一箇所にまとまっていなくて、分散している。目に入った例外は中島 (2006) である。ただし5文型の説明は一つにまとまって必ず一章を形成する。

それに対して生成文法はどのように文を生み出すかの視点から首尾一貫して言語を見ている。例えば、

(1) S → NP　Aux　VP
　　NP → (Det) (Adj) N (PP)
　　VP → V (NP) (PP) (S)
　　PP → Prep (NP)

ただし生成文法では、言語能力と言語運用を峻別する。(1)は、あくまでも言語能力の規則の形式化である。SからNP Aux VPを派生していく。このような操作は、時間軸に沿って語を結合していく実際の文構成とは、異なっている。ただし現在、生成文法の言語規則において「併合(Merge)」という操作が行われるがこれは実際の文構成とやや似ている。併合は2つの構成素を結合して、より大きな構成素を形成する文法操作である。立石・小泉 (2001: 40)によれば、

(i) 2項的である: 併合は2つの要素を結合する。
(ii) 非対称的である: 併合の結果得られる構成素は、それを構成する2つの構成素のうち、どちらか片方の性質だけを引き継いでいる。

しかし結合していくという点は似ているが、完全に時間軸に沿って語を結

合していくわけではなく、言語能力には時間という要素はない。また実際に文を形成していく時には、2項的でもないし非対称的でもない。それほど抽象的でも整合的でもない (cf. Culicover & Jackendoff (2005))。

生成文法は、人間の言語の抽象的な普遍性を目指すことが大きな目標である。それゆえ英語という個別言語から離れていく傾向を持つ。英語とか日本語など個別言語そのものを対象にしたい場合、そのことが不充足感を生む。

この言語能力を説明する規則に従って、実際に文を作り出していく時、つまり言語運用においては、さまざまな要因が加わる。中島・池内 (2005: 97-103) は、Chomsky (1965) で言語運用と言っているものの中に含まれる要因を5つに整理している。そのうちの第一番目は「単純な誤用、注意の散漫や関心の転換による逸脱」で具体例として次の例を挙げている。ピアニストの Christopher Szpilman がインタビューで質問に答えている発話である。

(2) I discovered in the attic when I was 12 or 13. It was a real shock to what my father went through and what happened to my grandparents from it. (*Newsweek*, 2003. 3. 24)

discover の目的語の the book、不定詞の to の後の learn、そして from の前の reading が欠落している。最後の it は the book を指している。

1. しかし拙論で試みようとしていることは、時間軸に沿って語を結合して、句を構成し、文を作りだす時、理想的にはどのようにしていくかということである。上で示したような実際の使用とは異なるが、といっても言語能力で目指している規則の形式化でもない。抽象的な眼に見えない移動のような操作は含まれない。

学習英文法で必要なのは、実際に文を組み立てる時、具体的にどのように語を連結させていくかという時間軸に沿った運用の規則である。ここでやってみたいことは、学習者が実際文を形成していく時にどのようにしていけばいいのかという問題である。

多くの場合、(1)に対応して、まず主語の NP を形成する。しかし NP は(1)

のように単純ではない。DetとNの間に様々な要素が生じる。すぐ思い浮かぶのは構造言語学時代のHarris (1951) の例である。

(3) all the ten fine old stone houses

英語は極めて順序に関しては厳しい言語である。*the all, *ten the, *fine ten, *old fineはすべて文法的ではない。これは日本語とは著しく異なる点である。(3)のようにたくさんの要素が同時に名詞に掛かる例を形成することは、学習文法で考える必要はないが、2ないしは3つの要素が掛かる例はありふれている。その時の順序は習得する必要がある。この順序については、安藤 (2005:480-482) は、次のようにまとめる。

(4)	a.	both/all/half	both
	b.	限定詞	the
	c.	序数詞	last
	d.	基数詞	two
	e.	評価	nice
	f.	寸法	big
	g.	年齢・温度	old
	h.	形状	round
	i.	色彩	red
	j	分詞	carved
	k.	出所	French
	l.	材料	wooden
	m.	(動)名詞	card
	n.	主要部	tables

(e) から (l) までが形容詞であり、「主要語と関係の深い、特殊なものほどその近くに置かれ、意味が一般的になるにつれて主要語から離れていく傾向がある。一般に、主要語に三つまたは四つの形容詞が併置されることはまれである」。そこで挙げられている例を示す。

(5) a. an attractive young Welsh girl

b. the only antique pewter jug

c. her new Austrian skiing boots

d. a long brown leather belt

e. some sour green eating apples

f. her small round pink face

この順序を知ることは、NPを形成する上で必要であり、様々な文法書で触れられている。例えばHornby (1975); 江川 (1991)。

実はもう少し細かくする必要がある。Detを含む(4)の(a)から(d)の部分である。(Det一般に関しては、池内 (1985) が詳しい。) (6)は順序に関するもっと細かい分類であり、(a)から(f)の順序にならぶ。自分の卒業論文 (1965) *On the Classification of Determiners* による。

(6) a. all both half

b. 1群 a the *pronoun* that (those) this (these)

2群 any each either every many most much

no some

c. 序数詞

d. 基数詞 few little several various

e. more less

f. other such

この表について次のことが成り立つ。

(i) 同じグループに属すメンバーは原則として同時には生じない。

(ii) (a)は(b)の1群に先行できるが、2群には先行できない。

all the boys both his books all these books

* all any *both either *half much

この部分もせいぜい2つないしは3つが結合されるにすぎないであろう。しかしこの順序が習得されていないと、次のような基本的な連鎖も表現できないであろう。

(7) all the three boys all such men any one rank any more chairs

every three days　each three minutes　the first six years　the next few weeks　many other cards　several more stamps　the next several sections　no such functions　two other novels　most such cases

しかし(4)と(6)全体を含めた主要部Nに先行する要素は、実際はあまり長くならない。これは言語処理を容易くするためと思われる(小川 (2007))。Culicover (2009) のあるページから2語以上先行する要素がついたNPの具体例をすべてを拾い上げてみる。1語の場合はほぼDetである。

(8) native speaker competence　some interesting way　the native speaker　a mentalistic theory　a productive and creative way　this mentalistic view　linguistic and contextual experience　two further questions　What sorts of experience　the internal resources　the achieved grammar　logically possible but linguistically impossible analyses　the child's linguistic experience　its most important goal　all these phenomena　the broader goal　the internal structure　a given language　the learner's internal resources

このことから明らかになるのは、せいぜい2つであり、多くの場合Det＋Adjが多く、(4)と(6)の表をそれほど頻繁に用いる可能性は、実際はないように思われる。

2. 次に主要部Nに後続する要素が結合される。日本語ではNの後に来るのは助詞のみであり、修飾要素は生じない。それに対して英語ではNに前置される要素とは対照的に、長い修飾要素が結合され、その種類も多様である。初歩の学習者には一部の結合方式を除いて、この結合はなかなかできない。

その種類を整理してみる。主として志賀 (2008: 27-30) による。

(9) 副詞　the boy *upstairs*　young people *today*
　前置詞句　a broad young man *with a red face*

the clock *on the wall above the lecturer's desk*

現在分詞　the boy *reading a book under the tree*

the imperious man *standing under the lamppost*

過去分詞　a temple *built for the priest three hundred years ago*

a stationary element *held in position by the outer casing*

不定詞　a friend *to talk with after school*

his duty *to take care of the children*

形容詞句　a voice *rough with disgust*

a person *capable of forming his own views*

関係代名詞節　a thin iron spiral staircase *that ended in darkness*

the man *who had done it*

関係副詞節　the world war *when I was a boy*

a life *where one can not get water*

同格名詞節　the fact *that money is essential to happiness*

his thought *that a new baby will come to the world soon*

同時に複数の後続修飾要素がつくときがあるが、その時に順序がある。比較的起こりやすいのは前置詞句と関係代名詞節とが同時に一つの主要部Nにかかるのと、2つ前置詞句が一つの主要部にかかる場合である。前者は主要部＋前置詞句＋関係代名詞節になる。

(10) a girl *with red hair who came from Britain*

後者は主要部＋補部＋付加詞の順序になる。

(11) a. the student *of physics with long hair*

b. *the student *with long hair of physics*

c. those expensive books *on linguistics under the desk*

d. many ads *on TV about kinds of soap*

学習者にとって補部と付加詞の前置詞句を簡単に見分ける方法があるのか。

主要部に意味的に関係が深いものを補部とすればよいのか。このことについてはもう少し調べる必要がある。

もう一つ重要なのは、前置詞句における前置詞の選択がある。松岡(1996)によると、例えば、

(12) a. a professor *at* Tokyo Kasei University

b. a novel *by* Soseki

c. an examination *in* algebra

d. a letter *in* English

e. an authority *on* biology

f. a man *with* a red nose

g. a class *in* English

ある名詞は特定の前置詞を取る。英文を組み立てる際、名詞句の中だけではなくそれ以外の部分でも前置詞は頻繁に用いられ、その選択は大切である。前置詞は英語の文を組み立てる時に、思っている以上に大切な役割をはたしている。これはいちいち覚えなければならないだろうか。この問題については、動詞に伴う前置詞を扱う時まとめて述べる。ひとことで言えば、一般に意味を土台にすれば個別に覚える必要はないのである。

この後続による修飾要素がNPをとても長くする要因であり、そのため文全体が長くなり複雑になる。先行する修飾要素が短いのとは対照的である。このことは学習者が文を組み立てる時だけではなく、文を理解していく上でも困難を感じるひとつの大きな原因になっている。次の例はNPが後続の修飾要素によっていかに複雑になるかを示している。後置修飾要素が付いたNを下線で示す。

(13) The government's <u>plan</u>, which was elaborated in a <u>document</u> released by the Treasury yesterday, is the formal <u>outcome</u> of the Government's <u>commitment</u> at the Madrid <u>summit</u> last year to put forward its <u>ideas</u> about integration.

とても複雑になっているが、そのようにしている手段は(9)で示しているだ

けである。いかに複雑なNPでも限られたやり方を繰り返し使用して組み立てられているにすぎない。少数の規則を繰り返し適用し複雑なものを作り上げていくことは、言語規則に関してではあるが,生成文法が一生懸命立証しようとしていることである。一方先行する修飾要素に関しては、日本語も同じように先行しなおかつ短いので学習者は困難をそれほど感じない。

3. ここでNPが完成するが、このNPを組み立てる方式は文を形成する時、きわめて高頻度で用いられ、主語の形成だけに限られるのではない。(1)が示すように目的語自身や前置詞に後続するのも名詞句である。それゆえこのやり方を習得することは、英語の文を組み立てたり、理解していく時、とても重要である。志賀 (2008) が「名詞群（ここで言う名詞句にほぼ対応する)」に注目して一冊の本にしていることがその証拠になるであろう。

特に文を理解していく上でNPの始まりと終わりを知ることは重要である。今までもっぱら語を連結していくことに集中してきたが、文は語が最初から最後まで単に連結されているのではなく、ある語とある語は密接に結合する、つまり語が構成素をなして文を形成することは、生成文法はもちろん学習英文法でも暗黙の了解である。

NPはDet 特に冠詞で始まる可能性が大きい。それとは対照的にNPの最後は特定の要素では終らない。終わりはNP自体ではなくそのあとに生じる要素が目印になる。主語のNPの終わりは次に続くAuxないしはVによって示される。実はこれは英語という言語の性質であって、NPだけではなく一般に構成素の始まりにはある特定の要素が存在するが、それに対して尾部には特定の要素はない。

(14) a. Everyone went there [on Sundays].
b. I came in [because it was raining].
c. We believe [that he is honest].
d. I am asking [whether you will accompany me].
e. She has a skin [which burns easily].

それと対照的に日本語は逆である。尾部はある特定の要素ないしは形で終るのに対して、始まりは多様である。この違いは動詞の位置の差に関係する(小川 (1972))。

(15) a. 皆、[日曜日に] そこへ行った。

b. [雨が降っているので] 帰った。

c. [彼が正直であると] 思っている。

d. [一緒に来るか] 聞いています。

e. 彼女は [日焼けしやすい] 肌です。

4. 次に助動詞＋動詞がくる。その時も順序は決まっている。Aux で can, may、must、will などを表すと、

(16)

$$(\text{Aux})\ (\textit{not})\ \begin{cases} \text{V} \\ \textit{have} + \text{Ven} \end{cases}$$

$$(\textit{do not})\quad \text{V}$$

$$\textit{be}\ (\textit{not})$$

(i) Tense は最初の要素が担う

(ii) *not* は 2 番目にくる。V のみの時は、*do* を挿入しその後に *not* を置く。結果として *not* は 2 番目になる。

have のみの時は、*have* + *not* になる。

この順序については学習者は完全に習得しているように思われ、難しさは感じない。多分何度でも出てくるために無自覚に習得してしまっていると思われる。

生成文法の言語能力の規則は、Tense については、

(17) Aux → Tense (M) (have en) (be ing)

であり、この句構造規則を仮定すれば、時制要素が一番最初の助動詞あるいは動詞に付くことは、Tense や en や ing を M や V の右側に変形規則で移動することによって簡単に説明される。

5. 助動詞の次の動詞によって文構成が決定され,きわめて重要な役割を持つゆえ様々な文法でそれが扱われる。動詞が文の構成を決定する時の基準として、文法機能と意味と構造の3つを挙げることができる。

文法機能は、5文型に代表される (小川 (1995))。

動詞には必ず伴わなければならぬ要素があり、その数は動詞ごとに決まっている。

動詞の前に必ず1つ、後に0か1つか2つ生じる。

要素の位置によって、S、O、Cのどれを担うか決まる。動詞の前は常にSになる。

動詞によって決まるOとCの組み合わせによって文型は決まり、5つのパターンがある。

基本的には、SとOは名詞句である。Cは名詞句か形容詞句である。Quirk et al. (1985) は7文型に拡張した。安藤 (2005) は8文型とした。

意味が関与するものに項構造がある。これはいわゆる格文法の流れの中にある考え方であり、生成文法でも扱われる。述語によって、項の数とその項が担う役割の種類は決まる。例えばsleepは項を1つ、arrestは2つ、putは3つ選択する。項の持つ役割を意味役割あるいは主題役割という。立石・小泉 (2001: 34-35) によれば、

動作主(Agent): 自己の意思で動作を行う主体

経験者(Experiencer): 感情や感覚などを抱く主体

対象(Theme, Patient): 動作や感情の対象、移動や状態変化の主体

着点(Goal): 物理的な移動や、所有権などの抽象的な移動の到達点

受益者(Benefactive): 利益の受け手

等である。そうすると、

<u>Aaron</u> slept.

動作主

<u>The police</u> arrested <u>the suspects.</u>

動作主 対象

Aaron　put　the book　on the desk.
動作主　　対象　　着点

最後に構造によるものがある。まず動詞型である。A. S. Hornby は長い間日本で学生に教えた経験から、動詞型の重要性を強く感じた。Hornby (1975)の序文で彼は次のようにその重要性を述べている（下線は筆者による)。

> Much attention has been paid during recent years to the selection of vocabulary for use in courses for those learning English as a foreign language. Comparatively little attention has been paid to the patterns or structures of the language. Yet it is equally, perhaps more, important to know how to put words together than it is to know their meanings. The most important patterns are those for verbs. Unless the learner becomes familiar with these he will be unable to use his vocabulary. He may suppose that because he has heard and seen 'I intend (want, propose) to come', he may say or write 'I suggest to come', that because he has heard or seen 'Please tell me the meaning', Please show me the way', he can say or write 'Please explain me this sentence'.

そして 25 の動詞型を立て,さらにそれを下位区分に分けた。安藤 (2008: 4-8) によると動詞型の一番進化したと思われるのは、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* であり 20 種類の動詞型がある。安藤を参考に、その中の動詞型をいくつかを見てみる。

V + adv./prep.

Please sit down.

I'm going to bed.

VN + adv./prep.

Could you drive me home?

He kicked the ball into the net.

VN-ADJ

Della considers herself lucky.

V that V (that)

I regret that I am unable to accept your kind invitation.

He said (that) he would walk.

V to

I want to leave now.

VN to

I forced him to go with me.

V -ing

She never stops talking.

VN -ing

His comments set me thinking.

生成文法では、厳密下位範疇化素性によって、動詞の取る要素を指定する。

arrive [_____]

find [_____NP]

put [_____NP PP]

persuade [_____NP (S')]

ここでは動詞のみ扱うが、形容詞についてもそれに続く構造が決まっている (Hornby (1975); 江川 (1991: 97-104))。

(18) a. We are ready to start.

b. It was very good of you to carry that heavy parcel for me.

c. We are proud that our school has a very long history.

d. She was not aware of the facts.

e. He is doubtful whether he can afford it.

6. それではどの方式が文を組み立てるのに一番有効であろうか。上の方式には重複する部分があるが、基本的には構造型であろう。ある動詞が使える

ためにはその動詞の後に生ずる構造を知る必要がある。これが欠落すると文構成はできない。安藤 (2008: 4) も「構造型の文型は、大学生などが英文を書く場合に高い実用性を発揮する。」と述べている。ただし厳密下位範疇化素性だけでは不十分であり、もう少し細かくしていく必要がある。

以下で試みてみたいのは、動詞の意味から構造型の文型がほぼ導き出せるのではないかということである。大きな枠組みで言えば意味と統語現象は極めて密接に連関しているという主張に当てはまる現象であることを示したい。つまり次が成り立つ。

動詞の意味 → 項構造 → 機能型文型（5文型）→ 構造型文型

いくつかの例でそれを確認してみたい。

学習文法によく出ているものは、不定詞と動名詞の対立である。大抵リストの形で出ている。しかしこれをそのまま丸暗記しなければならないのだろうか。江川 (1991: 362-367) は、次のように意味が関与することを指摘している。

不定詞は時間的に未来を指向する動作・状態を示す。動作の実現に対して積極的含みを持っている。

(1) 要求・希望　He asked to be given leave for a week.
　　I want to have a date with Dorothy.

(2) 意図・決心　We aim to please our customers.
　　I didn't mean to offend you.

(3) 賛成・援助・約束
　　We agreed to go skiing.
　　He volunteered to act as a messenger.
　　We guarantee to deliver within a week.

(4) 期待　I expect to be there this evening.

(5) 準備　We arranged to meet them at 11 o'clock.
　　I'm preparing to take the examination on Monday.

(6) 敢行　Who would dare to stand up to him?
He didn't venture to express his honest opinion.

動名詞は、時間的に中立であるか、過去を指向する。

(1) 時間的に中立

She enjoys singing to herself.
He practices flying a glider every weekend.

(2) 時間的に過去

The thief admitted entering the house.
He denied having ever touched the safe.
Can't you recall telling me that story last week?

動名詞は動作の実現に消極的含みを持つ動詞と結合する。

(1) 回避　You must avoid getting involved in such matters.
Somehow or other he escaped being punished.

(2) 延期・遅延　A lazy person delays starting a job.

(3) 終了・休止　I finished reading the book last night.

他人に対する許可・禁止・助言などを表す動詞の目的語になる。

(1) 許可・禁止　They prohibited picking flowers in the alpine zone.

(2) 助言・勧告・提案

We advised (their) starting early.
I recommend taking moderate exercise.
He suggested visiting the exhibition.

これを見ると動詞の意味が構造の選択に関与することが予想できる。つまり Dixon (1991: 69) や Levin (1993: 5) に繋がることになる。

Once a learner knows the meaning and grammatical

behaviour of most of the words in a language, then from the meaning of a new word he can infer its likely grammatical possibilities; or, from observing the grammatical use of a new word, he may be able to infer a good deal about what it means. Dixon(1991: 69)

Further examination of the nature of lexical knowledge confirms that various aspects of the syntactic behavior of verbs are tied to their meaning. Moreover, verbs that fall into classes according to shared behavior would be expected to show shared meaning components. Levin(1993: 5)

7. さらに進めてみよう。もう少し整理すると、小川(1977; 1980; 1981)で明らかにしたように「要求・希望」「意図・決心」などの動詞の意味から、不定詞が示す内容は、必然的に

(i) 現在は実現していない未来のことである。

(ii) 未来において実現するかどうかは白紙、事実かどうかに関する判断は含まれていない。

さて不定詞を取る動詞はto Vしか取れない動詞とさらにNP to Vも取れる動詞と2つの種類に分けることができるが、これはその動詞が持つ意味からかなり予測できる。

意図・決心は自分のみに関わるので相手はいない。それゆえ to Vのみである。

aim attempt decide determine resolve seek try

The prisoners attempted to escape but failed.

She decided to go.

それに対して希望は自分だけではなく、相手にして欲しいと願うこともできる。そうすると相手を示す項が増え、V NP to Vの動詞型も可能になる

はずである。事実そうであり、NP to Vは 主述関係になる。

desire want would like wish

She desires you to come at once.

Do you wish me to come back later?

一方要求は必ず相手がいるので常にNP to Vになるはずである。

ask beg request require

She asked him to wake her at 6 o'clock.

I requested them to stop making such a noise.

これを拡張してみよう。もっと広く、相手に働きかけて相手に何か行為をさせる意味を持つ動詞は、未来志向でその行為は実現するかどうかは不問で、なおかつ相手が必要であるので、NP to Vになると予想できる。実際そのようになる。

許可 allow forbid permit

命令 command compel direct force instruct order urge

説得 persuade

忠告・警告 advise tell

I forbade my son to use my car.

The general commanded his men to attack the city.

I instructed him to come to work earlier.

Try to persuade him to let us go with him.

I advise you to leave now.

動名詞の助言・勧告・提言の類に入るadvise, recommendは意味から考えると不定詞のみ取りそうであるが、上のリストが示すように動名詞も取る。またsuggestは意味からNP to Vを取りそうであるが取らない。細かく調べて行くと一見当てはまらない例があるが、多分なんらかの意味上の違いが原因になっていると思われる。将来の検討の課題としたい。意味が変わると同じ動詞でもそれに伴う構造が変わる。例えば、

(19) a. They do no allow you to smoke. (許可する)

b. We must allow that he is a brave man. （認める）

そして、

(20) a. I insisted that he *changed* his clothes. （主張する）

b. I insisted that he *change* his clothes. （要求する）

(桒原・松山(2001: 168))

そしてこのうち言葉を使って伝えると思われる動詞はさらにthat節も取れる。ただしthat節の中はshouldを含む（主としてイギリス英語）か、動詞が原形に必ずなる（主としてアメリカ英語）。以後 that…shouldで示す。これがなぜそうなるかについては後述する。

ask beg require; forbid; command direct instruct order; persuade; advise tell

I asked that she should go.

She forbade that anything should be added to the soup,

He ordered that the offenders be taken away.

We persuade her that she should go on a picnic with us.

I advised her that she should wait.

以上まとめると、3つの意味上の要因でどの構造をとるかは、かなり予測できる。

(i) 未来を示す→ to V

(ii) 自分だけの行為 → to V　　相手がいる → NP to V

(iii) 言葉を使って言う → that…should

学習者にとってみれば、リストで覚えるよりできるだけ記憶する負担が少ないほどよい。意味を土台に動詞のとる構造が予測できれば、効率的に学習することができる。それとは対照的に生成文法はできるだけ統語部門と意味部門を切り離す傾向があった。

8. 生成文法では、不定詞と動名詞とthat節を補文としてまとめている。そこでthat節をとる動詞も考えてみよう。稲田(1989)に動詞がどのタイプ

の補文を取るかの詳細なリストが載っている。

知る・知っている　know　learn

理解する　understand

思う　believe　consider　expect　feel　guess　imagine　suppose　think

思わない・疑う　deny　doubt

言う　say　complain　boast　declare; inform　tell　warn; explain　confess　suggest

認める　acknowledge　admit　confess

これらの動詞はどういう意味特徴を持っているだろうか。認識や伝達を示す動詞が多い。いままで展開したことから明らかになったことは、補文は特定の意味を持つことであった。that Sはどういう意味特徴をもっているのか調べてみる。このthat SのSは主節のSとまったく同じ形であるので、まず主節のSはどういう特徴をもつのか調べて見よう。主語と述語から形成されている。このSを言う主体、つまり話し手がその内容を事実であると見なしている(小川 (1977))。このSの表す内容を命題と名づける。

(21) The old lady climbs up the stairs with difficulty.

(21)について話者はその内容を事実であると見なしている。

that SのSについてもこれはあてはまる。ただし事実であると見なしているのは主節の主語になることが多い。ここでは They あるいはJeanがそれを事実であるとみなしている。

(22) a. They say that the old lady climbs up the stairs with difficulty.

b. Jean confessed that she had eaten all the cakes.

それに対して前述したように、不定詞はその内容が事実であるかどうかに関しては白紙である。その内容は未来のことであり、それが事実かどうか、実現するかどうかに関してはまったく関与していない。事実かどうかの判断を含んでいない。それに対して次のthat節の内容は未来のことを言っている点では不定詞と同じであるが、そのことが多分起こるだろうと主語が判断をしていて、まったく白紙という訳ではない。

(23) He thinks that he will be given leave for a week.

前述したthat…shouldもその動詞の意味から必然的に事実であるかどうかの判断に関しては白紙である。これは要求・希望・必要・忠告などの意味を持つ形容詞もまたthat…shouldを伴わなくてはいけないことから明らかである。これらはすべて未来のことを言っているが、実現するかどうかについては触れていなくて話し手の現在の心的な状態を表現しているにすぎないからである。例文は江川(1991)などによる。

(24) a. It is imperative that he make a final decision.
b. John is anxious that she understand his motives.
c. It is not necessary that every one should be first-rate—either actresses or singers.
d. It is important that exceptions not be made.
e. It is advisable that you leave now.

そうするとthat…shouldは、不定詞の内容とこの点において一致する。それゆえ次の例が示すように、不定詞とthat…shouldがしばしば交換可能であるのである。

(25) a. It is imperative for him to make a final decision.
b. John is anxious for her to understand his motives.
c. It is necessary for you to do it.
d. It is important to learn to read.
e. It is advisable for you to leave now.

それに対して、that節は事実という判断を含んでいるので、意味の上でそれと相容れる、上で述べたような動詞がthat 節をとることになる。

以上の議論で、不定詞、動名詞、that節、shouldを含むthat節という構造は固有の意味を持つことがわかった。動詞の持つ意味がその構造と調和するように、動詞はその構造を選択することになる。動詞の意味からその構造はかなり予測できることになる。このことは、学習者が構造型を覚えなければならない負担を減らすことになる。

9. さらに主述関係があるがテンスはない（be動詞がない）次のような小節(small clause)も補文と考えてみよう。

(25) a. the water running in the bathtub

b. a new house built

c. the water hot

d. you a soldier

e. his eldest son in boarding school

f. the television on

今までの観察から推察すると、小節もまたなんらかの意味を持っているはずである。Stowell (1978) は小節が意味上、状況あるいは出来事を示すと述べる。このような意味を持つことは、次の観察から支持される。榊原 (1980) はこの種の連鎖が知覚を示す語と共起することを指摘している。

(26) a. *John angry* is a scary sight.

b. It was a yellowing Polaroid photograph of *T. J. on horse.*

また金子 (1991: 27-3) も「～が～している写真」の表現がこの種の連鎖を伴うことを観察している。

(27) …the pictures of *small children disporting themselves in classy sunhats on the beaches of southern Europe.*

次の文例も状況・場面を示す証拠としてあげることができるだろう (志賀 (2008: 30))。

(28) a. the sight of *a student walking into the school with his hands in his pockets*

b. the picture of *American business men tossing from side to side in sleepless beds and haunted by nightmares of competition*

さらに情景や写真以外にも状況を示す語と生じる。

(29) a. *Everybody yelling about taxes* is an interesting development.

b. *Workers angry about the pay* is a situation to avoid.

最後の例から明白なように小節それ自体にはその状況が事実かどうかの判断

は含まれていない。

そうすると以下の動詞が小節を取ることが予測できる。

五感で状況を捉える feel hear listen to observe see smell watch

I felt something touching my foot.

I've never seen John so sick.

I saw a police car parked across the way.

I can smell the toast burning.

次の動詞は普通その意味から物・事・人を示すNPを取る。その代わりに状況を示す小節を取ることができると拡張すると、

状況を持つ have

The houses had their roofs ripped off by the gale.

I can't have you doing that.

状況を作る make

He made his influence felt.

The long walk made us all hungry.

状況を得る get

Please get your hair cut.

He got his shoes and socks wet.

Tom got John out.

状況を始める set start

The music set her imagination working.

I set the machine in motion.

His careless remarks started the audience buzzing.

状況のままにしておく hold keep

His speech held them silent.

He held a bottle concealed in a brown bag.

We must not keep them waiting.

状況を捉える　catch

Suddenly he glanced up and caught me staring at him.

I caught them at it.

状況を好む　like　want

I like my lunch hot.

They all want me dead.

I don't like you yelling at her all the time.

I want my car in.

今までの議論から、動詞の意味によってその取る補文のタイプがかなり予測できることが分かった。

10. 最後に構造型が前置詞を含むに例を考えてみたい。ある動詞はある特定の前置詞と結び付く。いわば自動詞＋前置詞で一つの他動詞として働くことになる。

(30) a. You can *rely upon* that man.

b. He *succeeded in* solving the problem.

c. This *belongs to* me.

もう一つのタイプは V NP PPである。

(31) a. They *robbed* him *of* his watch.

b. We *congratulate* him *on* his success.

c. She *reminds* me *of* her father.

この時、動詞に伴う前置詞は、動詞ごとひとつひとつ覚えていく必要があるであろうか。すでに小川 (2001; 2003) で明らかにしたように、意味から推測できる。類似した意味を持つ動詞は、一般に同じ前置詞を伴う。

(32)　（くっつく）add to　adhere to　attach to　cling to

（戦う）battle against　fight against　war against

（望む）hope for　long for　wish for　yearn for

（依存する）count on　depend on　hinge on　rely on

（異なる） differ from diverge from

(結合する) combine with connect with link with

(33) （奪う） rob…of defraud…of deprive…of strip…of

（備える）decorate…with fill…with provide…with supply…with

（分ける）break…into classify…into divide…into separate…into

（讃える）compliment…on congratulate…on felicitate…on

（使う） expend…on spend…on waste…on

さらに名詞と形容詞に伴う前置詞についても同様のことが成り立つ。

(34) （授業） class in course in lesson in

（返答） answer to rejoinder to reply to response to

（支配） control over dominion over jurisdiction over power over

（言語） in Japanese in a few words in a low voice

（人体） with red hair with long legs with a big nose

（身に付けるもの） in a hat in a blue shirt in dark glasses in high-healed shoes

(35) （上手・下手） clumsy at good at handy at skillful at proficient at

（感謝） grateful to…for thankful to…for

（近接） adjacent to close to near to contiguous to

（従属） obedient to subject to subordinate to

（対立） contrary to opposed to opposite to

実は、前置詞の選択は品詞に関係ないのである。意味が似ていれば同じになる。

(36) （類似） compare…to （たとえる）; analogous to, close to, similar to; analogy to; resemblance to

（障害） obstructive to; barrier to, hindrance to, hurdle to

（感謝） thank…for; grateful to…for…, obliged to…, thankful to…for…; appreciation for…, gratitude to…for…, thanks to

（望む） ache for, hope for, wish for, yearn for; hungry for, thirsty for; desire for, hunger for, lust for, thirst for, wish for

11. 以上、動詞がとる構造の選択の問題は意味からかなり予測できることが明らかになった。Dixon (1991) や Levin (1993) の主張の正しさをある程度証明したことになる。ここでは構造型の一部しか扱わなかったが、その他のものに関しても意味が関与すると思われる。例えば二重目的語構文など。別の機会を見つけて試みてみたい。なお構造型についての辞書形式のものは、小野 (2007) や T. Herbst et al. (2004) がある。

このように文を組み立てる時、意味が基になる原理は、副詞が VP 内で生じる時、様態(Manner)→場所(Place)→時(Time)の順序になることにも姿を現す。

(37) VP → V NP (Manner) (Place) (Time)

言語表現の根底には意味があることがしみじみ実感される。

12. 本稿では、実際に文を組み立てていく時、どのようにすればよいのかの問題について、その一部の解明を試みた。

参考文献

安藤貞雄 (2005)『現代英文法講義』開拓社.

安藤貞雄 (2008)『英語の文型　文型がわかれば、英語がわかる』開拓社.

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Pr.

Culicover, P. (2009) *Natural Language Syntax*, Oxford Uni. Pr.

Culicover, P.W.& R. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford Univ. Pr.

Dixon, R. M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*, Oxford Univ. Pr.

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 金子書房.

Harris, Z. (1951) *Methods of Structural Linguistics*, Univ. of Chicago Pr.

Herbst, T. et al. (2004) *A Valency Dicionary Of English—Corpus-Based Analysis of the Complementation Patterns of English Verbs, Nouns and Adjectives*, Mouton de Gruyter.

Hornby, A. S. (1975) *Guide to Patterns and Usage in English*, 2nd ed., Oxford Univ. Pr.

池内正幸 (1985)『名詞句の限定表現』新英文法選書第6巻　大修館書店.

稲田俊明 (1989)『補文の構造』新英文法選書第3巻　大修館書店.

金子　稔 (1991)『現代英語・語法ノート』教育出版.

桒原和生・松山哲也 (2001)『補文構造』英語学モノグラフシリーズ 4 研究社.

Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, Univ. of Chicago Pr.

松岡博信 (1996)「前置詞「of」の論理性と連体助詞「の」の超論理性について——句構造の階層性の有無に焦点をあてて」安田女子大学『英語英米文学論集』5, 113-122

中島平三 (2006)『スタンダード英文法』大修館書店.
中島平三・池内正幸 (2005)『明日に架ける生成文法』開拓社.
小川　明 (1972)「日英語の語順比較——鏡像関係と言語普遍性の視点から」山口大学『英語と英米文学』7, 19-32.
小川　明 (1977)「For-to と that 補文標識選択の原理についての試論」『名古屋工業大学学報』 29, 109-116.
小川　明 (1980)「陳述緩和の述語の特質」『名古屋工業大学学報』 32, 49-55.
小川　明 (1981)「That 節にあらわれる叙想法の should 考察」 Litteratura 2, 17-28.
小川　明 (1991)「There 存在文についての一考察」千葉修司その他編集『現代英語学の諸相』377-86, 開拓社.
小川　明 (1992)「Small Clause をとる動詞」『東京家政大学研究紀要』32, 143-152.
小川　明 (1995)「五文型について」『東京家政大学研究紀要』 35, 257-266.
小川　明 (1999)「動詞に伴う前置詞　意味から見た統語現象」稲田俊明その他編集『言語研究の潮流』83-96,　開拓社.
小川　明 (2001)「前置詞の選択の原理について——語はどの前置詞を伴うか」『英語英文学研究』7, 65-79.
Ogawa, Akira (2003) "A Semantic Analysis of Collocations between Words and their Prepositions", *Empirical and Theoretical Investigations into Language*, ed. by S. Chiba et al., 551-566, Kaitakusha.
小川　明 (2007)「文処理から見た英語 (SVO) と日本語 (SOV)——名詞句と節の長さ及び埋め込みの比較」『英語英文学研究』13, 42-68.
小野経男 (2007)『英語類義動詞の構文事典』大修館書店.
Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

榊原弘章 (1980)「知覚意味と補文選択」『英語学』22, 89-100.
志賀　謙 (2008)『名詞文法と語群研究』鳳書房.
Stowell, T. (1978) "What was There before There was There", CLS 14, 458-71.
立石浩一・小泉政利 (2001)『文の構造』英語学モノグラフシリーズ 3 研究社.